

よろい

甲を着た古墳人だより



公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団

かないしもしんでん

金井下新田遺跡

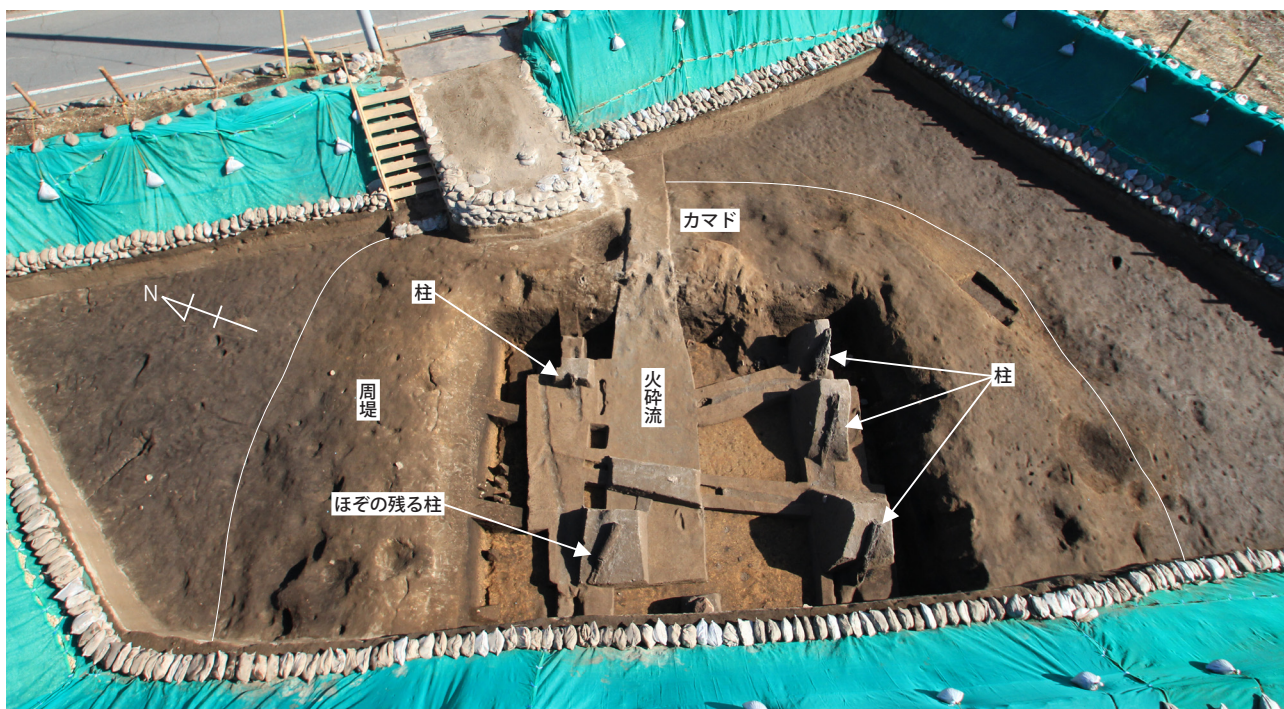
重要な建物か！

囲い状遺構の内部に大型竪穴住居発見



(国土地理院 1/200,000 「宇都宮」「長野」使用)

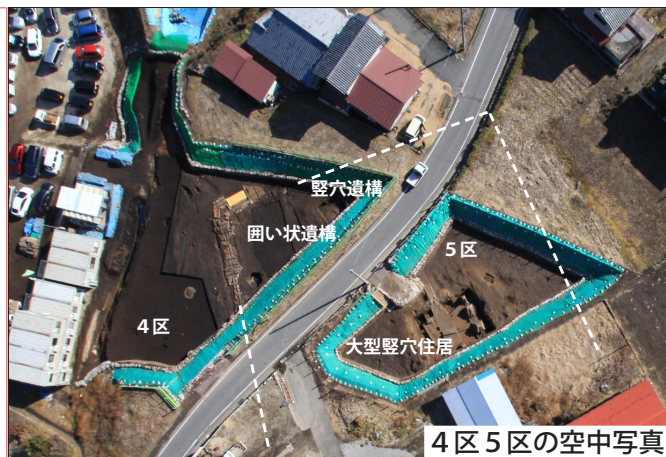
平成26年4月から国道353号金井バイパス(上信自動車道)の建設に伴って発掘調査を進めている金井下新田遺跡で、網代垣(甲を着た古墳人だよりvol.14)が巡る「囲い状遺構」の内部から大型竪穴住居が発見されました。この住居は、一辺が約9mの方形で8本の柱を持つ珍しいもので、重要な建物の一つと考えられます。床面から周堤と呼ぶ周囲の高まりの上までは1.6mほどあり、東側の壁にカマドが設けられていました。6世紀初頭の榛名山の噴火に伴う火砕流堆積物によって埋没した状態で炭化した柱5本と梁や桁と考えられる痕跡が見つかりました。5本の柱のうち4本は東に大きく傾いていたことから西側から襲った火砕流によって倒されたものと考えられます。注目されるのは、床面に6世紀初頭の噴火の最初に噴出した火山灰が堆積していたことです。これは榛名山が噴火した時、すでに住居には屋根がなかったことを示しています。また、南西部の柱の1本で確認された「ほぞ」は、これまで古墳時代の竪穴住居で確認されたことはなく、当時の建築方法を考える上で極めて重要な発見となりました。



金井下新田遺跡で発見された大型竪穴住居

■ 囲い状遺構

5区の南側（右手）で囲い状遺構の一部とみられる痕跡が確認され、囲いの範囲は破線のようになる可能性がでてきました。大型竪穴住居は、網代垣の囲い内部で発見されており、重要な建物の一つと一考えられます。囲いの中には他に一辺約4mの竪穴遺構が1カ所確認されています。



4区5区の空中写真

■ 際立って高い周堤

住居周囲の火砕流堆積物を取り除いた様子です。周堤は住居を掘り上げた土を周囲に盛り上げたもので、当時の地面から40cmほどの高さがあります。写真中央の四角のくぼみが竪穴住居で、中には火砕流堆積物が厚く堆積していました。



大型竪穴住居の検出された状況（東から）

■ 奇跡的に残った柱

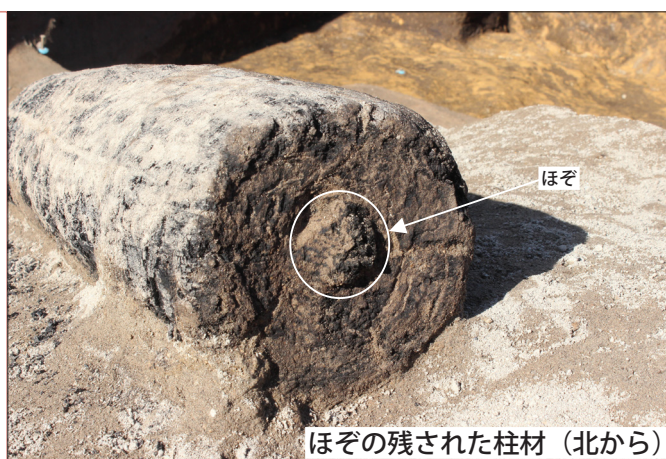
倒れて発見された4本の柱は、住居の上半分を覆った火砕流堆積物の熱で上半だけが炭化して残ったもので、下側は朽ち果てたものと考えられます。また、住居内に溝のように見える部分は、梁や桁の痕跡と考えられます。



炭化した柱などの検出状況（西から）

■ 現代と同じ工法

残りの良かった柱の上端に、幅5cmほどの「ほぞ」と見られる突起が確認されました。こうした工法は、現代の木造建築でも使われているものですが、古墳時代の竪穴住居の柱材に確認されたのは全国的にみてもとても珍しい例です。



ほぞの残された柱材（北から）